

水海道RC会員の皆様へ

11月15日の会長挨拶の中で紹介した「日本一長い校歌」の歌詞です。
生徒はもちろん、先生方も覚えるのに大変な校歌です。話のネタに！

長野諏訪星稜高校 校歌

第1校歌

序説

ああ博浪の槌とりて 打破せむ腐鼠の奴原が
彌生半ばのこの夢を

- 一、東に高き八ヶ岳 西にはひたす諏訪の湖
大和島根の脊梁と 信濃にしるき秀麗の
湖山の中に聳え立つ 吾學び舎を仰がずや
- 二、春城上の花霞 白帆のかげもほのかなる
衣ヶ崎の朝ぼらけ 芙蓉の峰を望みては
昔忍ぶの石垣に みやびの胸の通ふ哉
- 三、夏は湖水の夕波に 岸の青葉をうつしつ
オール執る手も勇ましく 漕ぐや天龍富士守屋
げに海國の日の本の 男の子の意気きぞたのもしき
- 四、唐澤山に秋長けて 御空も澄める運動場に
思えば遠し千早振る 建御名方の英霊や
絶えて久しき大神の 武健の腕を鍛へばや
- 五、冬、綿嶺の山の雲 吹雪ぞ荒るる北風に
堅氷鎖す方十里 若しそれ月の色冴えて
學窓書に親しまば 吾雄心の湧かずやは
- 六、見よ千頃の田園や 煤烟つゞく製糸場
世界の富を集めては 國の基を興さんも
希望にみてる青春の 吾等を措きて誰かある
- 七、思へや汽笛中央の 鉄路に沿うて響きつゝ
心は驅ける五大洲 理想の岸は遠くとも
日に新たなる進運の 學びの道に後れめや
- 八、それサクセンの林中に 獨逸の國の力あり
清き流れはアルプスの 深き谷より出づとかや
ああ信山の健児等の やがて咲くべき春や何時

第2校歌

- 一、おしける難波の群あしの 世は昏々と華に眠り
赴々武夫のおもかげは 氷に鑿りし玉楼の
消えてあとなしあなあはれ
- 二、空しかるべきをの子やも いで獨歩せむ天地に
驚がかゝなく八岳の 山高の骨ゆく青雲の
たかき志を身に負ひて
- 三、ひらかばならむ梓弓 はるの古城のはつ花と
躍らばならむ天龍の 風雲紫閃の間より
空を凌がむ勢と
- 四、怪鳥かけらふわたつみの 中に暮布せる亂島や
雲たち迷う國原の あをひとぐさはたによりて
平和の二字を得むとする
- 五、春秋多き青年が わざにたぐへば筑波山
は山繁山しげからじ 濱のまさごもいかでかは
われ等たゞずばよをいかむ
- 六、いざや友垣とぎおろす 破邪の利劔にうつる身
のよしやつるとも大君に 南洋東亜の人の子に
尽くさでやまむ心かと
- 七、朝嵐暮烟名細しき 湖山の中にみごもれる
霸氣喚びおこし武に文に この世をさます床虫
とならでやむべき此身かは
- 八、あゝ麗水に金砂あり 崑岡玉を出すとか
亂麻をたつの英傑は 其地人士の精粹の
凝りては出づと知るや君
- 九、再び槌をふりあげて いくその魔をばくだけか
し夫れ質實をたてにして やよ勤儉をよこにし
て織りも出でなむ校風を
- 十、山をもぬかむ意氣をもて 海をものまむ慨をも
て鉄槌三度かざしては あらが手ぷりに靡けと
やをたけべ友よ茜さす

終説

朱曦八荒を照らすとき 芙蓉峰頭一點の
理想の花の咲かむまで